

完全無欠の男の子なん
ですが誰も認めてくれ
ようとしません

神風響姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

同性からの告白の対処法を述べよ。ただし被告白者は褐色細身の少年であるとする。

◎ 本作品を読まれる上での注意事項

・ ポーズラブ要素がありますが深刻なアレではないのでコメディとしての一要素とお考え下さい。

・ たまに何言っただかちつとも分からん事態が生じますが巧みな想像力及び妄想力でナイスフォローしてください。

・ 主人公の外見における可愛さ指数は振り切れておりますがうまく言葉にできない。

目次

クラスメートの場合

1

クラスメートの場合

僕の名前は、青柴優希。

どこにでもいるフツートの男の子です。

突然ですが、困ったことが起きてしまいました。

あ、そうだ。

その内容を話す前に、僕の身の上について話を少々。

前述の通り、僕は普通の子供だ。

他人と違うところを強いて挙げるならば、手足の隅々までこんがり焼けた褐色の肌と、肩まで伸びたやや長めの髪だろう。

この外見になったきっかけ、というほどのものはない。日々野を駆け日が暮れるまで遊び呆けていたら、肌は程よい褐色に染まり髪は肩まで伸びていた。

まあ、床屋で切りに行くのも面倒くさいし、気が向いたら切ればいいかと思って放置していた。かけっこするには髪が若干邪魔だったけれど、適当に輪ゴムでしばれば問題なかったし、そんなに気にならなかった。

親が男らしくないから切れと言ったり周りのクラスメートが女みたいとはやし立ててきたら、僕もちよつとは気が変わったのかもしれない。あいにくと親はその辺自由な人なので、似合ってる似合っていると褒めそやし、友人たちも可愛い可愛いと手放して評価してくれたのも、原因のひとつだろうか。

子供はなんだかんだで褒められると調子に乗っちゃう生き物なのである。

一番の理由は、周りの男の子と自分は違うという、トクベツな感じが良かったっていうのも、あつたのかもしれない。

中学に入っても適度な長さを維持し、どうせだつたら大人になるまでどんくらい伸びるカナーなんて呑気に構えていて、残り一年もない中学校生活を満喫しようと日がな遊びほうけることだけが脳を占めていた。毎日特に不自由もなく、もうすぐ高校生かーと胸を躍らせていた。

そんなある日。

さあ今日は何して遊ぼう？ と意気揚々と下駄箱に向かうと、見慣れない白い便せんが靴の上に乗っかっているのに気づいた。

その時、僕に電流はしる。

これがいわゆるラヴ・レターというやつか！ そうなのか！
やっつと青い春つまり青春が訪れるというのか！

いらんほどテンションアゲアゲになった僕は走り出しそんな足を落ち着かせ、乱れそうになる息を整えながら指定された校庭の隅に向かうと、そこにはすわ美少女が照れた表情で待っていた――

なんてことはなく、なんか見慣れた学ランが一人立っていただけだった。

はぁドツキリかよ、超ガツクシ。

まあここまで来たんだ、せめて文句のひとつくらいぶつけても構わんのだろう？ 僕は鼻を鳴らして前へ進んだ。

木の下にいた少年がこっちに気が付いた。きつとうまくいったみたいな顔で待ってんだろうなあ。ムカついたら一発殴るのも辞さないぞ。なんて思っていたけれど、見知らぬ少年はどこか緊張した面持ちで待っていた。

あれ。なんか予想と違うような、様子がおかしいような……。

首を傾げてから、どういふことか問いただそうと口を開いた。

その直前、機先を制した少年が、開口一番、

「青柴。好きだ。付き合ってくれ」

大胆かつストレートに、告白されました。

……？

………???

………うん、ちよつと待つて。

今の、何？

好きだつて聞こえたんだけど。

もしかして、僕、告白された？

え、ちよ、マ？ 魔材？ そしてマジ？

どういうことだ。冗談か？ 悪ふざけか？ 手の込んだ罰ゲームか？

そして貴様は誰だ。

「………」

金髪少年は立ち尽くす、無言のままに敢然と。つて言うとかッコいいよね。

ハイすいません真面目にやります。

いや真面目も何もないんだけど。

僕の期待していた美少女からの告白は無かった。悪い意味で期待とは違う結果が待

ち受けていた。

現実つて、厳しいね（涙ホロリ）

で。

この爆弾発言投下してソワソワしているパツキン男は一体僕をどうしたいって言うんだろう。

つーか、告白の対象を間違っているんじゃないか？ 名前は一緒だけど別の人でした的な。

とはいえ、青柴なんて珍妙な名前の人物はこの学園には二人としないし、僕と容姿がうり二つな人間なんてどれだけいることやら。

しかし僕男だぞ。見たら分かるだろうが。

あと。

当たり前の話だが、僕は女装しているわけでもないし、女口調というわけでもない。

平凡な学ランと、至って普通の標準語を使っている。

体躯は細身で、顔立ちは幼いし、女顔ではあるものの、れっきとした男だ。

胸は膨らんだりしてないし、男の勲章が股間にしっかりついている。

言動もナヨつとしていたら勘違いを加速させていたこと請け合いだろうが、こちらら少し前まで元氣いっぱいなのワンパク小僧だったのである。言葉遣いも当然ヤンチャな子供のそれに等しい。本も読んでたから無駄に語彙力はあるけれど。

冷静になろう。慌てると事態は悪化の一途、相手の思う壺。

まず状況を整理してみよう。

目の前にいる少年は、確か同い年の軽部くんだ。

派手な金髪に、日差しを受けてギラつくピアス。

同年代よりも大人びた角のある顔立ちと低めの声。

体格も適度に整っていて、男性特有の筋肉質をわずかに体現している。

パツと見、よく道を歩いてそうなチャラい感じの少年である。

軽部くんは、彼は有名人だった。いわゆるイケメンというやつで、女子の会話の中でよく軽部くんの名前が挙がっているのを耳にした記憶がある。

成績はそこそこ良く、運動神経は抜群。部活に精を出すよりも遊ぶことが楽しいのか、特定の部活に身を置かず、たまに色々なところへ顔を出ししては助っ人として活躍している。

また交友関係は広いようで、時折廊下ですれ違うといつも誰かと一緒。たいていは女の子で、複数人を連れて下校している姿が目撃されるのもしばしば。

嫉妬故のものか、それとも普段の言動のせいなのか、女の子をとつかえひつかえしているのだの、二股三股は平然としていると信憑性の高い噂は絶えない。

さすがにそこまでは、と思う。思いたい。思うのだが、どことなく浮ついた、軽いイメージはぬぐえない。

世間でいうところの今風のチャラ男、僕からすれば人生謳歌しているタイプの人ってカンジ。

教室の真ん中で誰かと談笑している人間と、暇さえあれば外で遊び回っている人間。言うまでもなく軽部くんは前者で僕が後者。

同じ学舎にいるけれど、生きている世界がだいぶ違う。

面識なんて当然ない、まさに別次元の人だったのだ。

そんな人が何をトチ狂ったのか僕に告白するなんて想像できるだろうか。

「えっと、確か同じクラスの軽部くん、で間違いないよね？」

「そうそう！ 覚えててくれたん？」

ぱあーつと顔を輝かせる軽部くん。

「アルエーなんかいらん好感度が上がってね？ ひよつとして好きな子から名前呼ばれるだけで嬉しくなっちゃう系男子で候？」

いかん落ち着け。

これ、ひよつとしてこれは僕の知る軽部くんではなく別人なんじゃ、という僕の淡い期待は会話開始5秒で粉碎玉砕大喝采。

できれば君は僕のイメージ通りの、女の子を囲っているダメなチャラ男でいて欲しいかった。

まずいまずいまずい。黙っていても事態は進展しないどころか悪化の一図をたどるのは目に見えている。今もキラッキラの瞳で僕を見つめる軽部くんはもうオツケーもらったも同然みたいな顔である。お前頭冷やして常識ってもんを学びなおしてこいそして二度と戻ってくんなくんなくんなど言いたかったが、それは流石に人間の対応としてどうかとはばかられた。

「ごめん。ちよつと、頭の中で整理させてもらっていいかな？ 混乱しちやつてて……」
「おー。ぜんぜんオツケー」

ニツと力強い笑みを浮かべる軽部くん。

うーん、なんとという爽やかイケメン。同じ男から見ても素直にカツコイイと思う。

容姿的な問題ではなく、雰囲気的な話。一緒にいる女の子はさぞ楽しげな日常を送れているに違いない。

そんな人が僕に、告白？ 何故？ 意味が分からない。退屈な日常生活に刺激を求めようになつたか。女に飽きたから今度は男か。もしそうだとしたら全男子生徒のために僕は「皆さん！ 軽部くんは危険なホモです！ 知被かないよーに」と大声で叫ぶも辞さない。逆恨みで地獄を見そうだけど。

あ。

ひよつとして、やはりこれは罰ゲームか何かかな？ 女子との遊びの一環で僕に告白

するとか。

遺憾ながら、こんなナリなので女の子と勘違いされることはよくある。

今回ののは性質の悪いイタズラで、白羽の矢が突き刺さったのが僕ということではなからうか。とんだ迷惑である。

となると、物陰に誰かが隠れて様子をうかがっている可能性が高い。高いのだけれど、都合の良いことにここは校庭の端っこにある伝説の木の下。すぐ近くで隠れられそうなのは最低高さ5メートルの木の枝の上しかないのです、そうなると必然的にニンジャしか登れないため僕の学校にニンジャがいるということになる。訳が分からん。

「その顔は、なんで告白されたのか分からないって顔だな？」

「分かるわけねーだろこのスットコドッコイ」

罰ゲームにしても趣味が悪い。

同性からの告白を受ける者の反応として考えられるのは、相手の正気を疑う、もしくは最初から冗談だと決めつけるかのいずれかだろう。僕だつてそうだ。こんな性質の悪いイタズラを仕掛けるなんてちよつとどうかと思うよ。

・・・イタズラで、あつて欲しいなあ（切実）

「まあ、青柴は俺のこと知らねーもんな。俺がお前のこと知つてお前が俺のこと知らないのは、たしかに知つとかないと不平等つてやつだよな」

「いや結構です」

「なら、俺のことを教えてやるよ」

「いや結構です」

「お前を好きになつた理由をな」

「結構だつてんだろ」

軽部くんはまるで聞いちやいねえ。

「まあ自慢じゃないんだが、俺はモテる」

「うん知ってる」

「今まで付き合ってきた女は数知れず、気に入った女は口説き落とす。何もしないでも女の子たちが寄ってくるからその手の付き合いがなくなることはなかった。思いのままにわがままに、今までいろんな女の子と遊んできたが、残念なことに、この子はいい！　ってピンとくる子がいなかった」

「あ、そツスカ」

「最後の手段つーことで生徒名簿に載ってる女子の中から適当に指さしで選んで付き合つてみても、やっぱり長続きしなかった」

「ルーレット感覚で決めてんじやねーよ！」

女の子に不自由してません自慢が始まって僕は帰りたくなつた。

うん。なんか、やっぱり噂通りの遊び人だねー。

この時、僕は内心のんきにあははーと愛想笑いを浮かべていた。

「ところがある日、俺は運命的な出会いを果たした」

あ、真面目な顔になった。

「ある日の放課後。俺が机の中にしまいつぱだった携帯を取りに戻ろうと教室への階段を登ろうとしていたとき、上から誰かが駆け下りてきた」

一瞬で思い出して僕の顔から血の気が引いた。

「よっぼど慌ててたんだろ。階段をおりるというよりロックマンが崖ジャンプするような思い切りのよい飛び方で、踊り場に着地した次の瞬間には三角飛びの要領で壁をキックしてから階下へとダイブしてきた」

「その解説は必要なくない?」

何故挟んだんだ。

「踊り場から飛んだせいで、下から上がってくる俺との衝突は避けようがなかった。ドロップキックみたいな軌道で俺に激突した直後、一緒になって下へと転げ落ちそうになったが、幸いにも飛び込んできたのは小柄なヤツで、俺の厚い胸板と見事な筋肉によつてしつかりとナイスホールドしていた」

「最後のいらん説明やめろ気持ち悪い!」

「そして、大丈夫かと声をかけようとして……目と目が合った瞬間、好きだと気付いた」
「歌うなよ」

「まさに天にも昇る思いだった」

「目を開けたまま死んでないかなそれ」

「あの時、俺は人生で一番ドキドキしていた」

「ドキドキはそれつまり動悸だよな」

誰だつて階段から落ちそうになつたら心臓バクバクになるわ。

「これが俺の初恋だった。これが俺の、初恋だった」

「なんで二回も言ったし」

「——と、いうわけで、告白しようと思いついたわけよ」

「まるで意味が分からんぞー！」

軽部くんは満足げに、ふうと息をついた。すべて語り終えましたみたいな顔してんじやねーよ。おい、ちげえーからな？ 叫んだのは間違つても照れ隠しとかじゃねーかな？ だからその分かつてる分かつてるみたいなしたり顔で頷くなよ。殴りたいこの笑顔。

ブツ飛んだ内容だっただけに突っ込みどころ大爆発だったけれど、要約するとつまりこういうことらしい。

まさかと思うけど、ひょっとしてこの人、僕が男ということを知らないんじゃないかな？

漫画でよくある男装女子みたいなヤツだと勘違いしてない？ 女顔だし実は、みたいな。

いや、現実でそんなのあり得ないし、そんな愉快的勘違いしているとは思えないけど、そういう理由がないと僕に告白するなど常軌を逸した行いであるし正気を疑う。もし勘違いしているだけだとしたら、誤解は早いうちに説いておかねばならない。

「いいですか、聞いてください」

「おう」

「僕は、男です」

「ああ。知ってるよ」

「そっか。なら良かったってそんなわけないよね!?! おかしいだろ!」

「どうして?」

「君、今まで女の子と付き合ってたんでしょ!?! そういう趣味はなかったんでしょ!?! フツの人の人なんでしょ!?!」

「そーだよ」

「じゃあ最後まで貫き通せよ! 普通でいてくれよ頼むから!」

「その辺の連中は普通なのかもしれないが、俺はスペシャルなのさ」
「何ドヤ顔してんじやこらーっ！」

2000回か？ 模擬戦か？ 続編での彼の活躍に期待。

この人、彼女いただろうに。何股かけてるかで賭けが行われるくらいいたじやないか。

僕だって耳にしたことがある。軽部くんがリアルハーレムを形成しているという噂。実際彼は常に女の子を侍らせて、片手では数えきれないくらい何股もかけていたそう
な。

そのせいで同級生だけでなく先輩後輩、挙句の果てには他校の生徒からも陰口を叩かれていた。うざい奴だ死ぬ、とか、ああいうのがいるから俺たちの評判が下がる、とか。所詮持たざる者の妬みでしかなかったけれど。

一億五千万歩譲って、彼女はいないにしても、あんなだけ多くの女の子に慕われてたんだから、恋人を作る選択肢がより取り見取り黄緑白みどりだろうに。安全地帯を歩いていたのに何故核地雷の中へホップステップ飛ばして大ジャンプしようというのか。

僕の言いたいことは彼にも伝わったらしい、軽部くんはフツと腹立つくらいニヒルな笑みを浮かべて言った。

「ああ。それなら全員フツといた」

「嘘だろ!？」

ハーレム王国崩壊のお知らせ。

「安心しろ。ラインとかじゃなくて、昨日までにちゃんと一人ひとりに会って、しつかり謝つといた」

「あの、僕には何も安心できる要素ないんだけど。ちなみに興味本位で聞くと、なんて言つて別れたの？」

「『本当に好きな人を見つけた。この気持ちを大事にしたい。だからほかの人と真剣な付き合いはもうできない、ごめん』って」

これでもかかってくらい誠意溢れる別れ文句だった。

「あー、えっと。相手は誰かとか聞かれなかった？」

「聞かれたぞ? 同じクラスの青柴だつて言つといた」

「終わった・・・」

何故馬鹿正直に名前を提示したのか、これが分からない。僕はホモの考えが分からない。い。分かりたくもないが。

どうしよう。明日からホモと元カノから色々なモノを狙われる毎日になりそうで、結論を言うとうすぐ死にたい。

「あ、へーきへーき。お前の名前出したら皆『青柴君なら・・・』って納得してくれた」

「なんでだよ！」

「おかしいだろ！ どうして皆許容できるんだ!? 彼氏が男に鞍替えしようとしてんだぞ！ 止めろよ！」

B L 的な需要がありそうって？ 貴様らそれでいいのか?! いいのか!?

「本当は、黙ってようって思ったんだ。話しかけようにも今まで話したことなんてなかったし、迷惑かもって思ったら声かけらんなくて、どうしたらいいか分かんなくなっちゃまった……」

おい、なんでここにきて謙虚になつてんだ。最初からそのスタイルを持ってよ。

「でも話しかけなきゃなーんも変わらねえし、それに他のヤツに先越されたくないし、どうせなら思い切ってイッチャおうかなって」

「逝つてしまえば良かったのに」

「やっぱ男は度胸だろ！ 思い切つていった方がいい時もあるって！」

「永遠に秘めてくれそしてそのまま土に還れ」

「それは一緒に墓に入ってくれという意味で F A ？」

「行間で飛躍させすぎーっ！」

「俺はもう、己の素直な気持ちを偽りたくねえんだ。これからは自分に正直に生きるんだ……！」

「おいおいおいちよつと待つてくたさいよ貴様。伝説の木の下でホモ告白からのノンケ卒業宣言とかダイナミックすぎるだろ」

「大胆な告白は男の子の特権だつて大多のヤツが言つてた」

とりあえず、大多くんなる人物は後で一発々よう。

成程。そろそろ考えがまとまってきたぞ。

現実を直視しなければならぬとようやくと認識し始めただけでもいう。

突っ込み疲れて息切れしかかったせいで逆に冷静になったのは誠に遺憾であるが。

ここでひとつ、結論を出してしまおうと思う。

つまりその、なんだ。

何が言いたいかつていうと。アレだ。

彼は本当に、僕のことを好きらしい。

ネタとかギャグじゃなく、本気で。

.....。

いやいや。

いやいやいやいや。

話聞けよ！ 受ける気は無いんだってー！ 聞いてんのかおーい!? あ、ちよつ待つ、戻れこらー！」

軽部くんは言いたいことだけ言うと、校門の方へスタスタ行つてしまった。

見事な去り際であった。持てる限りの爆弾を投下してすぐ立ち退くこの手際の良さ、さすがは一級モテ師。多分付き合つてた子たちもフラれた直後ポカーンとしたまま置き去りにされたに違いない。

今の僕のように。

「……………ええー」

伝説の木の下に取り残された僕。その手はむなしく虚空をなでるばかり。

どうしよう。嵐のように過ぎ去つていったから、ちゃんと断れなかつた。

これがヤツの計画だとすれば、見事目論見通りうまくいったということに。

冗談ではない。

僕は男と付き合う気など毛頭無い。女の子が好きで女の子と付き合つて、女性と結婚して幸せな家庭を築きたい。そんなフツの願望がある。

そこに男が介入する余地など無い。

無いつたら無い、無いのだ。

ああ。

どうして、僕がこんな目に遭うんだろう……。

そんな切ない思いが胸中を駆け巡る。

当然答えなんて、誰も教えてはくれないし、教えられそうな人物はさつき帰りやがった。ガツデム。

「とりあえず、明日ちゃんと断ろう……」

いらん疲労を抱いてしまった。今日は遊ばずまつすぐ帰ろう。

やたら重く感じる鞆を背負い込み、夕焼け道を一人歩いて帰るのだった。

『それに他のヤツに先越されたくないし』

この言葉に引つ掛かりを覚えなかつたことを、後々僕はすこぶる後悔するのであった。